



写真：制御情報工学科 5年 永谷昌也「家族でお出かけ」



1. 「新入生と在校生の皆さんへ」

高松キャンパス図書館長 河野 通弘

2. 教員によるエッセイ

「31歳、読書歴10年」

機械電子工学科 石井 耕平

「読むことはむずかしい」

一般教育科(社会) 山岡健次郎

3. 卒業生・修了生から

「本を読むこと」

建設環境工学科卒業生 吉崎 晋理

「図書館のすすめ」

電子制御工学科卒業生 三谷 佳一

「この1年を振り返って」

創造工学専攻修了生 古免 久弥

「一期一会」

電子情報通信工学専攻修了生 高津 朋裕

4. 図書館貸出冊数〈平成25年4月～平成26年2月〉

5. 教員・学生による推薦図書 全18編〈教員9編・学生9編〉

6. 下半期ランキング〈図書、CD、DVD〉

7. 図書館からのお知らせ

新入生と在校生の 皆さんへ

高松キャンパス図書館長
河野 通弘



新入生の皆さま、入学おめでとうございます。これからの5年間、もしくは7年間、ここでの生活がよりよい思い出となるよう衷心願っています。ところで、若い新入生の皆さん、また在校生の皆さんは、「啐啄之機」という言葉に出会ったことはないでしょうか。いい言葉だともおもいますが、まず皆さん、読めるでしょうか。「そつたくのき」と読みます。では、その意味はどうでしょうか？自分がまだ学生だったとき、この言葉をはじめて知りました。読み方は何となくわかりました。辞書によると、「啐」は雛が内からつつくこと、「啄」は親鳥が外からつつくことらしい。

この言葉は、鳥の雛が孵化するとき、雛が卵のなかからそのくちばしで殻をつつくまにその機に、親鳥（母鳥でしょう）が卵の外から殻をつついてやって、雛が殻を破るのを助けてあげる、という親鳥と子鳥との絶妙のタイミングを示したものです。そこから禅宗など、懸命に修行する若い坊さんに師が何かを示すと（その師に意図があったかどうかは別です）、修行僧が何かを悟るときにも、この言葉が用いられるようです。大事なことは、

この場合も、主体はあくまで修行僧で、そのひとの修行しただいだという事です。ちゃんと修行しておれば、理解することができるでしょうし、怠けておればなんにも感じないということになります。世の中、いろいろな人がおります。

この意をすこし広げてゆるやかにします。ひとがなにかの苦悩を抱え込み、救われたいと願っているとき、誰かの不図した言葉とか所為によって、あるいは自然現象からも、それを受けた者には衝撃のインスピレーションとなって、問題解決をむかえることもあります。技術の賜物である発明もそういうことがあるようです。

さて、この稿でこの言葉を持ち出してきたのは、もし学校がこの親鳥だと考えてよいのなら、学校と学生の皆さんの関係、または図書館と学生との関係はどうなのだろう、と少し考えたかったためです。学校や図書館にもいろいろな人がいて、たくさんの本があります。これらは休むことなく皆さんを突っついています。過度な突っつきは卵それ自体を壊すかもしれないので禁物ですが、ただ、それを受け取る側も感度を上げておいたほうが何かと受け取りやすいのではないかとおもいます。日々すこしずつ感度を自らがよくして行って、四方八方にアンテナを張り巡らせてください。日ごろから数えきれないほどの機に会って、やがて本当に啐啄の機が訪れるようになれば、とおもいます。（なお、そうなるかどうかは、本人しだいということをお忘れにならないでください）。この学校や図書館、その蔵書が、そのような皆さんの手助けになれば、と願ってやみません。

教員によるエッセイ

31歳、読書歴10年

機械電子工学科
石井 耕平



私が図書館へ行くようになったのは21歳の頃です。高専で言うところの専攻科生の年齢ですから、決して皆さんのお手本とは言えませんね。

飛行機が好きだった私は21歳の時、国内唯一の国立パイロット養成機関である航空大学校を受験しようと決心しました。それまで、ろくに勉強した事のなかった私は、勉強の仕方すら分からぬまま、とにかく問題集と教科書に向き合い続ける日々でした。その間、多くの時間を過ごした場所が大学の図書館でした。洋書コーナーの片隅

にある勉強スペース、今でもはっきりと覚えています。授業を〇〇って図書館で勉強した事もありました。勉強に疲れたら休憩がてら本棚の間を歩いて回り、また勉強。少しずつ力をつけていきましたが試験の結果は不合格。それまでの積み重ねがないのですから仕方ないですね。ただこの経験のお陰で、コンビニへ立ち寄ることと同じくらい、図書館へ行く事、本を読むことが日常なことになりました。今となっては懐かしい図書館での思い出です。

それから10年、私は今どんな本を読んでいると思いますか。手元にある本のタイトルを挙げて見ましょう。羽生善治のはじめて詰め将棋、旅をする木、日米地位協定入門、ピザ窯パン窯の作り方、所有せざる人々・・・将棋？木？外交？ピザ窯？最後の本はなんだ？バラバラですよね。10年間ずっと、これが僕のスタイルです。図書館や本屋へ行くときは目的を持っていくのですが、決まって帰りには予定外の本を手にしていくのです。買い物へ行って、予定外の洋服を買ってしまった経験はありませんか。たくさんの種類の洋服の中から、新たな流行を知ること、面白いものや自分に似合いそうなものを見つけることは、予定していた買い物をする以上に楽しいものですよ。図書館でも同じ現象が起きるのです。

言葉にするのは難しいのですが、図書館は多様な情報が詰まった、ある意味ノイズあふれる空間だと思うのです。そんな空間に身を任せることで、知らず知らずのう

ちに、それまでは遠く離れた、自分とは何の関係もないと信じて疑わなかった世界が身近なものになって行く。そして身の回りの物事に、色彩や興行、輪郭が加わりリアリティーが生まれてくる気がしています。そんな感覚を10年目の新米読書家は楽しんでいます。

最後になりましたが、高専を卒業すると航空大学校への進学が可能です！興味のある学生はいつでもご連絡を!!



読むことはむずかしい

一般教育科(社会)
山岡 健次郎



戦中戦後に血の滴るような文章を書き残した思想家の竹内好が、魯迅の文章について面白いことを言っている。

「私は人をだましたい」(1936年)という文章のなかで魯迅は、「浅間山のそばには宿屋はあるに違いないが、象牙の塔を建てる人はいないだろうと思う」と書いた。日本語で書かれたこの文章を通じて、魯迅が、当時の日本の読者に訴えかけたかったポイントは明らかだ。「浅間山」は言うまでもなく活火山であって、それは緊迫した日中関係を暗示しているし、「象牙の塔」とは、そういう現実から逃避している知識層を揶揄しているのだろう。

にもかかわらず、竹内は『魯迅』(1944年)のなかで、なぜ「浅間山」なのかがわからない、と書いている。

大学院で私の師事したS教授があるとき、この竹内の文章について、すごい「読み」を実践してみせてくれたことがある。現在の私たちにも明らかだが、竹内にわからなかったはずがない、彼にはもちろんわかっていた。ではなぜ、竹内は「わからない」と書いたのか。

魯迅が「私は人をだましたい」を書いた当時、先ほども言ったように、日本と中国との関係は険悪化していた。その翌年には実際、事態は日中戦争(1937～1945)へと進展して行く。そうした状況の中で、魯迅はその文章を日本語で書いている。言うまでもなく、魯迅は直接的に日中関係に言及することはできなかった。検閲の可能

性があったからだ。そこで日本人であれば誰もが知っている「浅間山」を隠喩として持ち出すことで、中国人の心情を日本社会へ伝えようとした。

竹内が『魯迅』を書いたのは、その後に日中戦争が泥沼化し、大東亜戦争へと進展していた状況下であった。すなわち、日本社会の言論状況は、魯迅が「浅間山」と書いた当時よりもさらに緊迫していた。もし竹内が「浅間山」についての解釈を丁寧に行ってしまうと、間違いなく当局の検閲に引っかかり出版が差し止められてしまう。それだけは避けたい。しかし、魯迅の書き残したこの文章についてはどうしても触れたい。どのような方法がありうるか。なぜ「浅間山」なのかがわからない—そのように書くことで竹内は、検閲を逃れながら同時に、読者の注意を、魯迅が日中戦争直前に書いたあの一節へと引き寄せようとした。浅間山—活火山—日中関係という連想が、読者自身の内部で展開することを期待して。

そのように、S教授は竹内の文章を読まれた。卓見だと思った。文章を書くことの、そして読むことの奥深さに触れる思いだった。

読むことはむずかしい。しかし面白い。私たちは、読むことを通じて、歴史の襞に入り込むことができるし、人生の真実を垣間みることができるのだから。